The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	論説詩の崩壊 : ロンサールの転機
Author(s)	岩根, 久
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11945
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論説詩の崩壊
―ロンサールの転機―

岩根　久

デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』(1549年春) に象徴されるように，ロンサールを総師とする「プレイヤッド」の詩人達が，古代ギリシャ・ローマおよびイタリアの文学に範を求め，自国の文芸の水準を高めようと努力したことはよく知られるところである。ロンサールはかかる運動を推進しつつ，自ら独自の作風を確立してゆき，1560年に自己の作品の集大成たる『総合作品集第一版』(*Première édition collective des Œuvres de Ronsard*) を上梓する。一方，それより二年前の1558年，サンニジュレーの後を襲い，宮廷第一の詩人，〈 le prince des poètes 〉の地位を得，ついで王室付司祭に就任する。かくして名実共にフランスに於ける詩の第一人者となった彼が，まず手掛けようとしたのは新しい詩の分野の開拓であった。当代の歴史的事件に題材を求めた詩，すなわち論説詩[1]の執筆である。

さて，ロンサールのこの論説詩を研究するにあたっては，従来，彼が論説詩に着手し，途中新教徒達との論争[2]を交え，最終的には1563年に事実上論説詩を放棄するまでの経緯を時間を追って分析するという方法がとられている。

従って本稿では，論説詩のたどった詳しい経緯については上述の方法によるすぐれた研究書[3]もあるのでそれに譲るものとし，ロンサールの論説詩放棄を「論説詩の崩壊」ととらえ，その原因を論説詩の「構造」に求めるという手続きをとる。

I　論説詩の二重構造

ロンサールが《Discours》と銘打った作品を出版し，[4] 本格的に論説詩執筆に乗り出す1562年は，歴史的に見ても重要な年である。この年の春，ギーズ公の率いる軍勢により，ヴァッシーの町で新教徒の大量虐殺が行なわれ，いわゆる宗教戦争が始まる。これ以後，1598年のナントの勅令まで，この新旧両派の闘争は続くことになるが，論説詩はこのような歴史的背景のもとで執筆されたのである。

では，何を目的としてロンサールは論説詩に着手したのであろうか。まずは彼自身の言葉からそれを探ってみよう。

Or quand Paris avoit sa muraille assiegée,
Et que la guerre estoit en ses fauxbours logée [……]
Voyant le Laboureur tout pensif et tout morne,
L'un trainer en pleurant sa vache par la corne,
L'autre porter au col ses enfans et son lict :
Je m'enfermé troys jours renfrongné de depit,
Et prenant le papier et l'encre de colere,
De ce temps malheureux j'escrivi la misere……

(*Responce aux injures*, vers 1075 - 1084)

当代の悲惨な有様を目の当たりにして，詩人は悲嘆と怒りの余りペンを執った。しかしそのペンの鋒先はどこに向けられているのか。

論説詩を読めば，攻撃が新教および新教徒に向けられていることに容易に気が付く。

Vous estes dés long temps en possession d'estre
Par armes combatus, nostre Roy vostre maistre
Bien tost à vostre dam le vous fera sentir,
Et lors de vostre orgueil sera le repentir.

(*Continuation du Discours*, vers 67 - 70)

彼は新教徒の横暴を説き，フランス荒廃の原因たる彼らが制圧されることを願う。また，彼らの教義である新教神学は唾棄すべきものであると断ずる。

Je ne veux point respondre à ta Theologie,
Laquelle est toute rance, et puante, et moisie,
Toute rapetassée et prinse de l'erreur
Des premiers seducteurs, incensez de fureur.

(*Responce aux injures*, vers 1091 - 1094)

彼は，この反プロテスタントの立場について，『罵詈讒謗への答弁』に付された『読者への手紙』の中で，自ら明かしている。

Bien est vray que mon principal but, et vraie intention, a toujours esté de taxer et blasmer ceux, qui soubs ombre de l'Evangile (comme les hommes non passionnez pourront facillement cognoistre par mes œuvres) ont commis

des actes tels, que les Scythes n'oseroient ny ne voudroient tant seulement avoir pensé.

(*Epistre au lecteur* qui précède la *Responce aux injures*, ligne 16 et suiv.)

この反プロテスタントの立場は，彼が宮廷詩人であり王室付司祭であるといういわゆる職務的条件をぬきにしては考えられない。ただし，それのみによって論説詩を性格づけることは危険であり，彼が個人的に新教と相容れない精神を持っていたことも見逃すことができない。[5)]

... l'Evangile sainct du Sauveur Jesuschrist,
M'a fermement gravée une foy dans l'esprit,
Que je ne veux changer pour une autre nouvelle,
Et deussai-je endurer une mort trescruelle.

(*Remonstrance au peuple*, vers 85 - 88)

いずれにせよロンサールは一連の論説詩によって新教および新教徒に攻撃を加えた。すなわち，論説詩は反プロテスタントプロパガンダの性格を持つ，言いかえるなら，新教の悪を論じ，新教徒の言動に論駁するというまさに論説の機能を持っているのである。これがまた，当代の悲惨を書き綴ったこれら一連の詩を論説詩と呼んで妥当な所以である。

論説詩執筆の意図は，新教や新教徒の攻撃にだけあった訳ではない。自ら《maistre Joueur de la Muse Francoise [6)]》を自認していたロンサールに，当代の悲惨の有様を綴れるのは私以外にないという並々ならぬ自負と，現実の出来事を素材にした新しい詩の領域を開拓せんとする野心があったことは否定できない。彼は，女神フランスの口を借りて，自らの意志を神託的に表現する。

Ce pendant pren la plume, et d'un stile endurci
Contre le trait des ans, engrave tout ceci,
A fin que nos nepveux puissent un jour cognoistre
Que l'homme est malheureux qui se prend à son maistre.

(*Continuation du Discours*, vers 444 - 444)

当代の悲惨を書き綴るということは，歴史家の役割を果たすということである。[7)]しかし，それ以上にロンサールにとって重要なのは，現実の事態という殺伐とした素材を詩句の中にちりばめ，韻律の横糸によって詩という美的世界を織り成すことであった。ロンサール

が詩人である以上，自らの作品は自己の詩的美意識が認め得る詩の構造を持っていなければならない。彼は論説という機能を持ちなおかつ自らが詩と認め得る作品を意図したのであった。

ところが，論説詩は論説として機能する限り，論説の構造をもつ。すなわち論説詩とは，ロンサール風の詩の構造と論説の構造をあわせ持った歪な構築物なのである。[8)]

II　論説詩の崩壊

ロンサールの論説詩は，その反プロテスタント的論説の故に，新教徒の憤激を呼んだ。彼らはロンサールに反駁する詩をパンフレットの形で次々と送り出し，彼に攻撃を繰り返す。これに対しロンサールは『罵詈讒謗への答弁』で反撃を試みる。ここにロンサールと新教徒詩人達との「パンフレット論争」が始まる訳である。

> Le camp est ouvert, les lices sont dressées, les armes d'encre et de papier sont faciles à trouver: tu n' auras point faute de passetemps. Mais à la vérité je voudrois que pour esprouver mes forces, tu m'eusses presenté un plus rude champion. Car j'ay le courage tel, que j'ayme presque mieux quitter les armes que de combatre contre un moindre, dont la victoire ne me scauroit aporter ny plaisir ni honneur.
> (*Epistre au lecteur qui* précède la *Responce aux injures*, ligne 56 et suiv.)

新教徒達が詩（むしろ韻文と言った方が正確かも知れないが）の形で自分を攻撃しているのを見て，ロンサールは嘲笑する。彼は，詩の分野における自己の絶対的優位を確信しているのである。

> Tu ne le puis nyer! car de ma plenitude
> Vous estes tous remplis: je suis seul vostre estude,
> Vous estes tous yssus de la grandeur de moy,
> Vous estes mes sujets, et je suis vostre loy.
> (*Responce aux injures* vers 1035 - 1038)

さて，相手方の詩人としての資質を云々する以上，自己の詩のあり方に対する認識が明確化されてゆくのは当然の過程と言えよう。

「パンフレット論争」は実に種々の要素から成り立っており，単なる誹謗中傷に流れるきらいも少なからずあるが，その中から文芸論争的側面を抽出することによって両者の詩に対する認識の相違が明らかになってくる。

M. RAIMOND の分類[9]に従えば，新教徒側のロンサール攻撃は以下の様に要約される。

1．詩の着想が独自のものでなく，古代作家，あるいはイタリアの作家の模倣であるということ。

2．文体が大袈裟で，造語を乱用しているということ。

3．詩に秩序も脈絡も見られず，つまりは理に欠けるということ。

4．彼の文学的名声は贋物であり，彼が自負するようなものではないということ。

これらの非難のうちでも第三の「詩に秩序も脈絡もない」という非難は注目に値する。ロンサールと新教徒詩人の詩に対する認識の相違を最も明瞭に表わしているからである。

Si ta harangue estoit un peu mieus agencée,
Ma reponse seroit autrement compassée,
Mais ta rime est sans art, sans ordre ou liaison,
Un faisseau deslié, et vuide de raison.

(*Remonstrance à la Royne* de RIVAUDEAU, vers 209 - 212)

Ici, pour sa faconde
Monstrer plus abondante, il nous fait, sans raison,
Sans grace, et sans propos, mainte comparaison,
En quoy le bon Poëte en nul temps ne s'esgare.

(*Replique* de LESCALDIN, vers 1212 - 1215)

ロンサールはこの様な非難に対して，詩人の真のあり方を示し，秩序や脈絡といった明らかな技法とは異った，それとはわからぬ技法を持っているのだと述べる。

Les Poëtes gaillards ont artifice à part,
Ils ont un art caché qui ne semble pas art
Aux versificateurs, d'autant qu'il se promeine
D'une libre contrainte, où la Muse le meine.
Ainsi que les Aradens aparoissant de nuit
Sautent à divers bons, icy leur flame luit,
Et tantost reluit là, ores sur un rivage,
Ores desur un mont, ou sur un bois sauvage.

(*Responce aux injures*, vers 873 - 880)

ミューズの導くままに詩を創造してゆく手法，それによって論説詩も創造されたのであ

る。従って秩序や脈絡がないという非難は，非難にならない。

「鬼火の詩法」はロンサールの詩を性格づけ，その詩法にふさわしい構造を詩に齎す。一方，ロンサールが論説詩によって自らの詩法を示し，新教徒詩人達に論駁しようとするならば，論説の構造が要求される。そしてその論説にふさわしい方法は，つきつめるところ，論理と脈格を重視する雄弁術の手法なのである。ロンサールは自ら，これは詩が用いるべき手法ではないと断じている。

En l'art de poësie, un art il ne faut pas
Tel qu'ont les Predicans, qui suivent pas à pas
Leur sermon sceu par cueur, ou tel qu'il faut en prose,
Où toujours l'Orateur suit le fil d'une chose.

(*Responce aux injures*, vers 869 - 872)

ロンサールが，詩は韻文で，論説は散文でという明確な自覚を持った時，論説詩は崩壊せざるを得ない。

秩序や脈絡に重点をおけば，確かに論説にふさわしくなるであろう。しかし散文臭くなる。詩が詩として純粋である為には詩から散文臭を排除しなければならない。この認識は「パンフレット論争」の中でロンサールが獲得し，それ以降の彼の詩作に少なからず影響を及ぼした貴重な認識であったと言えよう。詩は散文のように相手を説き伏せるといった目的を持ってはならないのであって，ただ作詩という純粋な喜びの為だけに作るべきものなのである。

...Je prends tanseulement les Muses pour ébas,
En riant je compose, en riant je veux lire,
Et voyla tout le fruit que je recoy d'escrire,
Ceux qui font autrement, ils ne scavent choisir
Les vers qui ne sont nés sinon pour le plaisir.

(*Responce aux injures*, vers 922 - 926)

この『罵詈讒謗への答弁』の後，彼はさらに新教徒詩人の詩の劣っていることを『新作詩三部集』に付された『読者への手紙』の中で示そうとする。散文で。

Or afin de te faire cognoistre que tu es du tout novice en ce mestier, je ne veux commenter ta responce (en laquelle je m'asseure de te reprendre de mille fautes dont un petit enfant auroit des verges sur

la main, car tu n'entens ny les rythmes, mesures, ny cœsures). Ceux qui ont quelque jugement en la poësie, lisant ton œuvre verront facilement si je parle par animosité ou non : seulement, pour monstrer ton asnerie, je prendray le Sonnet que tu as mis au devant de ta responce……

(*Epistre au lecteur* qui précède les *Trois livres du Recueil des nouvelles Poësies,* ligne 326 et suiv.)

この『読者への手紙』は，フローラン・クレチアンという新教徒詩人の一篇のソネに対する批評をその中心的な内容とするものであるが，これに対してクレチアンは『キリスト者の弁明』(*Apologie d'un homme Chrestien*) という散文作品をもって答える。このやりとりを論争として見る限り，クレチアンが優位に立っている感じざるを得ない。

論説詩の矛盾の自覚，すなわち論説詩の崩壊の後，散文の形をとって表われた論説詩の「論説」部分は，クレチアンの手によってとどめを刺されたと言えよう。ロンサールにとって散文で論説することはクレチアンが指摘するように極めて不利だったのである。

……quand à la prose, il n'y a si petit entre nous qui n'ait dans son cerveau deus ou trois magazins de responses, et de repliques, d'oraisons et d'epistres, de sermons et d'invectives, assez pour te faire courber sous le faix.

(*Apologie* de Fl. CHSESTIEN. ligne 719 et suiv.)

ロンサールは『新作詩三部集』に付された『読者への手紙』をもって「パンフレット論争」から身を引き詩作に専念する。これは，パンフレットの応酬を禁じた1563年の十月王令に従ったまでであると考えることもできよう。しかし，これまで述べてきたように，論説で新教徒詩人を圧倒できぬ以上，彼は実作をもってそれを示そうという方向に転じたのだとは考えられないだろうか。

論説詩の崩壊は，論説詩の持つ不安定な二重構造によって引き起こされたものである。ロンサールは論説詩に詩の新しい分野を求めた。しかし，論説詩の論説機能が引き起こしたプロテスタントの攻撃に対し，彼は皮肉なことに詩に於ける論説性を否定することによって反撃した。論説詩は必然的に崩壊せざるを得ない。ロンサールは詩の構造をより強固にする為には，詩から散文的要素をできる限り排除せねばならぬことを，この過程を通して自覚し，後に『フランス詩法概要』(1565年) に於て，アレクサンドラン詩句に言及する際，特にこのことを意識し，配慮を払っているように思える。

La composition des Alexandrins doibt estre grave, hautaine et (si fault ainsi parler) altiloque, d'autant qu'ilz sont plus longs que les autres, et sentiroyent la prose, si n'estoyent composez de motz esleus, graves, et resonnans, et d'une ryme assez riche, afin que telle richesse empesche le stille de la prose, et qu'elle se garde tousjours dans les oreilles, jusques à la fin de l'autre vers.

(*Abbregé de l'Art poëtique françois,* ligne 417 et suiv.)

ロンサールの論説詩もそれを攻撃した新教徒の詩もその大部分が平韻のアレクサンドランであった。彼は論説詩の失敗以降ほぼ十年余り，ほとんどアレクサンドラン詩句を使用していない。彼が散文臭を警戒する余り，アレクサンドラン詩句をも警戒したことが，このことからうかがえるのではなかろうか。

新教徒詩人達との論争の過程で，彼が自ら明確にした文体の自覚は彼の晩年まで彼の意識にあった。それは『フランシアッド』の序文[10]にうかがうことができる。

……car ils [les vers alexandrins] sentent trop la prose tres-facile, et sont trop enervez [11] et flaques, si ce n'est pour les traductions, ausquelles à cause de leur longueur ils servent de beaucoup pour interpreter le sens de l'Aucteur qu'on entreprend de traduire.

(Préface posthume de la *Franciade*)

まさにこのロンサールの論説詩の崩壊は，彼の後の詩作に与えた影響を考えると，彼の詩人生活に於けるひとつの転機であったと言えよう。

LISTES DES ŒUVRES CITÉES

RONSARD

Continuation du Discours (*Oeuvres complètes,* éd. P. LAUMONIER, tome XI, p. 35 et suiv.).

Remonsirance au peuple de France (*Ibid.,* tome XI, p. 63 et suiv.).

Epistre au lecteur qui précède la *Responce aux injures* (*Ibid.,* tome XI, p, 111 et suiv.).

Responce aux injures (*Ibid.,* tome XI, p. 116 et suiv.).

Epistre au lecteur qui précède les *Trois livres du Recueil des nouvelles Poësies* (*Ibid.,* tome XII, p. 3 et suiv.).

Abbregé de l'Art poëtique françois (*Ibid.*, tome XIV, p.3 et suiv.).
Préface posthume de la *Franciade* (*Ibid.*, tome XVI, p.331 et suiv.).

LES POÈTES PROTESTANTS

Remonstrance à la Royne de RIVAUDEAU (*La polémique protestante contre Ronsard*, éd. J. PINEAUX p.106 et suiv.).
Replique de LESCALDIN (*Ibid.*, p.231 et suiv.).
Apologie de Florent CHRESTIEN (*Ibid.*, p.466 et suiv.).

NOTES

(1) 「論説詩」という語の使用については注意を要する。ロンサールの『総合作品集』第二版（1567年），第五版（1578），第六版（1584年）には，彼自身によって《*Les Discours*》と題された作品群がある（第六版では《*Discours des miseres de ce temps*》）。山崎庸一郎氏はこれに『論説詩集』という訳語をあてている（山崎庸一郎「ロンサールと宗教戦争」『学習院大学文学部研究年報』第五輯，1957—1958，pp.325—357）。「論説詩」に対応するフランス語は《poésie polémique》であるが，『論説詩集』中の作品の総称として「論説詩」を用いる場合がある。単数形の《discours》（《*Les Discours*》の一作品を指すときなどに用いられる場合）は「論説詩」に近似的に対応する。近似的というのは，《*Les Discours*》が僅かながら散文作品を含むからである。ここで便宜上，「論説詩」に定義を与えるとするならば，「同時代の出来事を題材とし，広い意味で政治的色彩の濃い詩」とすることができよう。さすれば，必然的に散文作品を除外することになるが，本稿に於けるこの語の使用に関しては何ら問題はなく，そればかりか有益ですらある。

(2) 《La querelle des Discours》（M. RAYMOND），《Le combat des Discours》（D. MENAGER）。

(3) 下記参照。
F. CHARBONNIER *La poésie française et les guerres de religion* (1560-1574), Paris, Revue des Œuvres nouvelles, 1920; réimpr. : Genéve, Slatkine Reprihts, 1970 の第一部，第一節。
L'influence de Ronsard sur la poésie francaise (1550-1585), Genève, Droz, nouv. éd. 1965 の第十四章。
D. MENAGER, *Ronsard. Le Roi, le Poète et les Hommes*, Genève, Droz, 1979 の第三節。

(4) *Discours des miseres de ce temps* (1562) を指す。

(5) ロンサールの宗教的・政治的保守性に関しては，下記の書に詳しい。
P.PERDRIZET, *Ronsard et Réforme,* Paris, Fischbacher, 1920; réimpr. : Genève, Slatkine Reprints, 1970.

(6) *Responce aux injures,* vers 40.

(7) 歴史家の役割を果たす詩人については，D.MENGER, 上掲書，第三節，第二章，並びに下記参照。E.PRAROND, *Les poètes historiens. Ronsard et D'Aubigné sous Henri* Ⅲ, Paris, 1873; réimpr. : Genève, Slatkine Reprints, 1969.

(8) 現在ロンサールの論説詩が評価されるのは，その論説の側面ではなく詩としての側面からである。

(9) M.RAYMOND, 上掲書，pp.365-368.

(10) ロンサールの死後出版の『総合作品集第七版』(1587) に見られる。

(11) =privé de nerf: しまりのない

(D. 在学中)